

五十一回生クラス會

赤谷慶子

我は中等科一年の新學期始まりてほどなく父の赴任地米國の首都ワシントンへ引越したり。小學校五年生の折に佛蘭西より歸國し、我家の門前ありし區立小學校へ入學を願ひしもの、大和言葉全く忘れしたため、教員應へられずと入學は拒否せられき。白金にありしカトリック系の女子校へ入學せり。わずか三年のみの在籍なれど、米國の同系列の高校へ通ひたれば、初等科より高等科を卒業せる生徒らの在籍する同窗會「みこころ會」への入會を得き。我はいとなみを優先せさせたれば、十五年ぶりの参加なり。當時同級生達は兒童の時の顔の面影ありたり。此度おほかたの人達は白髪になりて、名と顔絶えて分からずなやみき。

級會は全員高齢化となり、ここ數年會は二年に一度の催し、加へてパソコンの交信すべからずといふ同級生おほかたのごとし。半數に及ぶ同級生パソコンの操るべからねば文交信は不可といふ。今後の級會の回文や、みこころ會に關わる消息提供等を如何するやといふ問ひ上がりき。我はいとなみ上常に文交信したれば、せむかたなく舉手し交信のみの預かりならばやるべしと意思表示せり。二年後は全員八十歳になりたる。以降の級會をいかがすや、その時の會合に定める合意期待すれば、全員考へておくやうにと幹事よりの提案ありき。八十人ありし同級生の内、一割はすでに他界せり。加へて此度も入院し不参加なりし人が二人。

1

會の終盤、聖母マリアの祈りを「世界の平和と會員の健やかなる」ことを願ひ祈念し、解散となりたり。全員が十字をきり、手を合わせ祈ることは在學中毎日朝禮、晝食時等數回すべきいとなみにて、懐かしきかなと覺ゆ。

中等科に上がるほど、上皇后陛下東宮妃に選ばれたり。新規の入学者突然増大し、級は三倍になりき。故に我は初等科よりの同級生の名は思ひ出したれど、新たに同級生になりし同級生の名は殆ど記憶にあらざりき。

(令和七年十月二十四日受附)